之ニ繫泊セシムルニ適スベシ。然リト雖之カ為ニ此地製塩所ニ得ル所ノ益少許ハアレ氏其他撫養港全地ノ貿易微タル市ニ得ル所ノ小利ヲ以テ豈巨額ノ改修工費ヲ償フニ足ランヤ

諸派川口ノコト

吉野川口ヲ修メテ港口トサントスルニハ甚タ不適当ナリトス是レ流沙日ニ甚シク為ニ益々悪状ヲ発スレハナリ川口ハ六ケ所アリ就中別宮川ヲ最上トス徳島ニ来リ又タ之ヲ去ル所ノ船舶ハ和船ニシテハ蝦夷ヨリ干魚肥料ヲ載セテ至ルモノ漁船ニシテハ大坂府ニ往復ヲナスモノニ過キサルナリ、別宮川ノ外ニ廣潮ナル砂灘アリ今其上ニ通セル澪線路ハ満潮ノ時ト雖浅キ所僅ニ八尺ニモ足ラズ而シテ貨物満載ノ和船皆出入ニ苦シム欲所ノ沙灘ヲ過キテ別宮川ニ入レハ水再ヒ深シ故ニ若シ沙灘ヲ削キ深澪ヲ堀ラバ十分船舶ノ出入ニ便ず。

仮使ヒ然スルノ後ト雖猶難事トシテ存スルモノハ只洪水ノ

港口（コウコウ）＝港の内口
流沙（リュウサ）＝砂洲
就中（トリワケ）＝とりわけ
蝦夷（エゾ）＝北海道奥羽地方
和船（ワセン）＝蒸汽船でない船
廣潮（コウカツ）＝広ト砂灘＝浅ト所
澪線路（レイセンロ）＝航路
深澪（シンレイ）＝舟路の深いこと。
仮使（ダシ）ヒ＝仮りに。
豈（アニ）＝どうして

に適するだろう。しかしながらこの地の製塩所が得ている利益は少しあるが、その他の撫養港全体の貿易による利益はわずかである。このためどうして巨額の改修工事を償うことができようか。

諸派川口のこと

吉野川（旧吉野川）の川口を改修して港口とするのは甚だ不適当である。それは日々に流沙（ママ）が激しく流れ、ますます状況が悪化するからである。川口は六か所あり、中でも別宮川が最上である。徳島に来たり、またここを去る船舶は、和船では蝦夷（北海道・奥羽地方）より肥料用の干魚を積載して来るが、汽船では大阪との往復をなすだけである。

別宮川の外に広々とした沙灘（ママ）があり、今その中に通じている澪筋（水路）は、満潮時でも浅いところはわずか八尺にも足りない、このため貨物満載の和船は、出入りに苦労している。この沙灘（ママ）を過ぎて、別宮川に入れば、水路は再び深くなる。このため、沙灘（ママ）を開いて深い水路を掘れば、十分に船舶の出入りに使用できる。

例え、そうした後でも困難なこととして残るのは、洪水の時に水

時間水流迅疾ナルカ為ニ入港ノ容易ナラサル即之ノミ
別宮川ヨリ徳島ニ至ル ノ間（距離大畧半里）ハ甚タ深シ唯
タ小舟ノ往来ニ便ス
津田川ハ徳島ノ市街ヲ通過シ且ツ往時ハ通船路トナスニ恰
好ナリシト見ユ・方今猶低水下三尺ノ深サヲ保チ市街ニ達
ス。蓋然津田川口ノ外方ニ於ケル沙灘ノ上深サ僅ニ低水下
一尺二寸ニ過ギス満潮ノ時ニシテ漸ク五尺余ナリ。該所ニ
今猶斯ノ如キ澪脈ヲ存スル所以ノ者ハ畢竟市街ニ縦横セル
諸濠ノ中ニ日々消長スル所ノ潮汐作用ヲ以テ其淤泥ヲ一掃
スルニ由レリ。尚ホ第四号附録トスル市街ノ平面図ヲ参見
セラルベシ
徳島市中諸濠ニ向ヒ潮汐来進ノ勢力ハ経久逐次ニ減衰シ復
タ周ク達スル能ハズ廻テ津田川及ヒ其川口モ益々深キヲ加
フ・且ツ近来ハ潮水ノ進路殊ニ壅迫ス是レ其原因主トシテ
市街ノ橋梁構架方法其宜キヲ得ザルニアラン カ・斯ル人為
ニ由リ幾何ノ壅塞ヲ潮水路ニ與ヘタルカ我ハ之ヲ表明セン
トテ嘗ミニ三四ノ橋梁ニ就キ尺ニ尺度セシ所アリ之ヲ左ニ
掲ク

迅疾＝早いこと
方今（ホウコン）＝当時
澪脈（レイミャク）＝舟路
消長＝干満すること
畢竟＝せつきよく
淤泥（オデイ）＝泥
経久＝久しきを経て
周ク（アマネ）＝広くいきわたる
壅迫（ヨウハク）＝ちじまる
壅塞（ヨウソク）＝ちじまりふさぐ

の流れが急であるために、入港が容易でないことである。
別宮川より徳島に至る約半里の間は大変浅く、ただ小舟だけが通航することができる。
津田川（新町川）は、徳島の市街地を通過し、また昔は通船路として格好であると見られていた、現在でも低水下三尺の深さで市街地に通じている。しかしながら、津田川口の外の沙灘（ママ）は、低水下わずかに一尺二寸に過ぎず、満潮時でもやっと五尺余りである。このところに今なお水路のある理由は、市街地を縦横に流れる数々の川や堀に日々去来する潮汐の作用が泥土を一掃するからである。なお※付録第四号の市街の平面図を参考に見ていただきたい。
徳島市中の数々の川や堀に去来する潮汐の勢いは、だんだんと弱まり、またすべて水路に達することができなくなった。そのため津田川とその川口もますます浅くなった。また近年は潮水の進路が殊に縮まってきた。その原因は、市街地の橋梁架設の方法が不適切であるためであろうか。人為によりいかなる閉塞を潮水路に与えたかを、明らかにするために私は三・四の橋梁について計測を行った。その結果を左に記す。

※付録第四号
所在不明

一、徳島県庶ノ近傍ニ架セル徳島橋
流水ノ廣　三十間ト五尺四寸
橋下ニ存スル流水ノ廣合計　一十間
故ニ潮路ノ塞絶ハ　二十間五尺四寸

一、福島橋
流水ノ廣　三十二間三尺六寸
橋下ニ存スル流水ノ廣合計　二十一間
故ニ潮路ノ塞絶ハ　一十一間三尺六寸

一、スケト橋
「スケトレ流水ノ廣　九十五間
橋下ニ存スル流水ノ廣合計　四十間
故ニ潮路ノ塞絶ハ　五十五間
此川床埒迄セル過半ノ部分ハ已ニ草ニ掩ハル

一、住吉橋
橋ノ近傍流水ノ廣　二十四間
橋下ニ存スル流水ノ廣　七間三尺
故ニ潮路ノ塞絶　十六間三尺

塞絶ハ（ソクビツ）。閉ざす事

スケト＝助任

一、徳島県庁の近傍の徳島橋※
流水の幅　三〇間五尺四寸
橋下の流水の幅（合計）　一〇間
潮路の閉鎖幅　二〇間五尺四寸

一、福島橋
流水の幅　三二間三尺六寸
橋下の流水の幅（合計）　二一間
潮路の閉鎖幅　一一間三尺六寸

一、助任橋
流水の幅　九五間
橋下の流水の幅（合計）　四間
潮路の閉鎖幅　五五間
この川底の露出した過半はすでに草に覆われている。

一、住吉橋
流水の幅　二四間
橋下の流水の幅（合計）　七間三尺
潮路の閉鎖幅　一六間三尺

※徳島橋
当時は寺島川（現ＪＲ牟岐線の位置）埋め立てられておらず、県庁（現徳島市役所の位置）と現文化センターの位置に架けられた橋の北側。

右算數ヲ一回スレハ則チ妨害ノ多寡自ヲ瞭然タリ。一旦妨害遮絶シタルノ潮勢ハ復タ津田川及ヒ川口ニ作用ノ逞シキヲ得ズ且ソ之ヲ挽回スヘキ者ニアラズ

上流鮎喰川ヨリ出デタル津田川ノ外他ニ又タ津田ノ地ニ潦澮スルハ幡タダラ桂ー三川アリ。就中桂川ヨリ流出セル砂礫最多ク津田ノ地ニ築港ノ不適当ナルコト之ニ起因ス

川線改良修治ノ事項
水源諸山ノ改良

吉野川一般ノ状態ニ就キ苟モ改良ヲ加ヘントスルニハ其挙行着手ノ期ニ先タチ豫メ察知スベキノ要欵トスル者ハ抑人現在ノ悪状ヲ生セシ原因之ナリ

都テ着シキ患難ヲ河川ニ延出スル所以ノ者ハ畢竟上流ノ諸山ヨリ多量陸続砂礫其他ノ諸物ヲ流下シテ以テ其河川ニ入ラシムルノ故ニ在ラントハ前文述フル所ノ事宜ニ照シ既ニ已ニ畧言セシカ如ク夫レ然リ。今若シ石礫土砂ヲ扞止スルノ法ヲ設ケ而シテ荒蕪ノ山地ニ草木繁茂ノ術ヲ施サバ則チ

シヤゼツ 遮絶。さえぎる
逞シキ。勢さかんなり
タカ 多寡＝多少
ソウカイ 潦澮＝水が集る溝
イヤシク 苟モ。もしも
要欵＝要項
ソモソモ 抑人？
テイシツ 延出。提出の意
シセン 事宜。事項
スデニ 既ニ。既ニ
カンシ 荒蕪＝荒れた
扞止＝防止スル

右の数値を一見すれば、直ちに〔橋脚が水路を〕妨害することの大きさが歴然としている。一旦妨害遮断された潮流は、津田川や川口に強力に作用することはなく、※その勢いをばん回することはできない。

上流の鮎喰川より流れ出た津田川（新町川）の他に、また津田の地に集合する八幡（園瀬）・多々羅・桂（勝浦）の三川があり、中でも桂川（ママ）より流出する砂礫は最も多い。津田の地に築港するのが不適切なることはこうした事情による。

川線改良修治の事項
水源諸山の改良

吉野川全体の状況に改良を加えようとする前に、察知しておくべき要点は、現在の悪い状況を生じた原因についてである。

すべて大変な被害を川に与えているのは、結局上流の山々より多量の砂礫その他の物質を次つぎと流出しているためである。このことについては、すでに概略説明してきた。今もし砂礫土砂を防止する方法を施し、荒れた山地に草木の繁茂する手段を講ずれば、干害

※その勢い…
このため土砂が堆積して水深が浅くなるため流入土砂を海中へ運び出せない。